

インド、アルナチャール・プラデーシュ州、 ウエスト・カメン県およびタワン県の鳥類相

大西信弘

京都学園大学 バイオ環境学部 バイオ環境デザイン学科

インド、アルナチャール・プラデーシュ州、ウエスト・カメン県およびタワン県の鳥類相と地方名について調査を行った。調査期間中に6目27科70種が確認され、それらについて36の地方名を知ることができた。70種のうち、13種については、規模の大きな集落で記録され、スズメをはじめとして、その分布が日本の中山間地同様に、東ヒマラヤでも人間活動と関連づいていることが示唆された。また、ディラン方言による鳥類の分類では、それぞれを固有の名称で識別していることが明らかとなった。

キーワード：東ヒマラヤ、鳥類相、民族生物学

はじめに

Conservation International は、1500 種以上の固有の維管束植物が分布し、原生の生態系の7割以上が改変された、絶滅の危機に瀕した地域を、生物多様性ホットスポットに指定し、2013 年時点で35カ所が選定されている¹⁾。ヒマラヤ生物多様性ホットスポット²⁾は、北パキスタン、ネパール、ブータン、インドの北西および北東部をカバーし、アルナーチャル・プラデーシュ州は北東部インドのヒマラヤ生物多様性ホットスポットに含まれる。ヒマラヤ生物多様性ホットスポットには、鳥類977種が分布し、そのうち15種が固有種である。隣接する、インドビルマ生物多様性ホットスポット³⁾に分布する鳥類1266種のうち64種が固有種であることや、日本生物多様性ホットスポット⁴⁾では366種中13種が固有種であることと比較すると、ヒマラヤの鳥類相に固有種が少ないことがうかがえる。

日本では、スズメが天然林、人工林、雑木林などには分布せず、果樹園や河川、人家周辺にみられることが報告されている⁵⁾。近年、ヒマラヤの豊かな自然環境の中で、人の作り出す環境がどのような影響を及ぼしているかについて報告がある⁶⁻⁸⁾が、鳥類については触れられていない。そこで、アルナチャール・プラデーシュ州のウエスト・カメン県とタワン県で鳥類相を調査し、人間活動が鳥類相にどのような影響を与えているのかについ

て議論する。また、ディランで鳥類の地方名について聞き取り調査を行い、鳥類相をどのように認識しているのかについても言及する。

調査期間ならびに、調査地

2009年8月26日～31日、ディラン、ナムシュ、テンバン、シャンティ、ナガジジ、ナガゼブ；2010年8月24日ボンディラ～ディラン、26日ボンディラ～ナムシュ～ディラン、27日ディラン～ナガジジ、31日ボンディラ；2010年9月4日～6日、8日～10日、14日バルチ村、ショーダ村、16日ディラン；2012年8月17日～19日タワン、22日～25日ディラン、バルチ、マンガラフドゥンで観察を行った。合計、27日間、道路脇や集落周辺に見られた鳥類を記録した。出現した鳥類については、できる限り写真の記録を残した。種名は、基本的に Grimmett et al. に従った⁹⁾。

調査期間中に、5目20科70種の鳥類が記録された(表1)。出現した70種のうち、56種が留鳥で、14種が渡り鳥であった。また、分布域は、ヒマラヤ・北東インドが44種、広域に分布するものが16種、ヒマラヤが8種、冬季の渡り鳥が2種であった。この地域に固有の鳥類は観察されなかった。

この出現種のうち村落周辺部に特徴的で、村落から離れるとみられなかった鳥類は、ヤツガシラ、カワラバト、カノコバト、カザノワシ(写真1)、

表1 アルナチャール・プラデーシュ州、ウエスト・カメン県とタワン県でみられた鳥類

目	科	和名	学名	ディラン地方での地名
キツツキ目	キツツキ科	キバアラカゲラ	<i>Dendrocopos darjellensis</i>	Tok Tor Ma
		チャバラアカゲラ	<i>Dendrocopos hyperythrus</i>	Tok Tor Ma
サイチョウ目	ヤツガシラ科	ヤツガシラ	<i>Upupa epops</i>	Namlakhochi
ハト目	ハト科	カワラバト	<i>Columba livia</i>	Titiri
		ミカドバト	<i>Ducula aenea</i>	Titiri
		キジバト	<i>Streptopelia orientalis agricola</i>	Titiri
		カノコバト	<i>Streptopelia chinensis</i>	Titiri
タカ目	タカ科	オナガアオバト	<i>Treron spheura</i>	Khu Khu Ma
		ニシトビ	<i>Milvus migrans</i>	Khaira
		カザノワシ	<i>Ictinaetus malayensis</i>	Khaira, Mon Kukpa
		ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	Khaira
		アカハラクマタカ	<i>Hieraetus kienerii</i>	Khaira
		クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i>	Khaira
ペリカン目	サギ科	ムラサキサギ	<i>Ardea purpurea</i>	
スズメ目	モズ科	タカサゴモズ	<i>Lanius schach tricolor</i>	Dun Krak Krak Pa
		チベツモズ	<i>Lanius minor</i>	
	サンショウクイ科	オナガベニサンショウクイ	<i>Pericrocotus solaris</i>	Brami Kha
	オウチュウ科	ヒメオウチュウ	<i>Dicrurus aeneus</i>	Thakchung Kha
	オウギビタキ科	ノドジロオウギビタキ	<i>Rhipidura albicollis</i>	Lamsi Kha
	カラス科	ホシガラス	<i>Nucifraga caryocatactes</i>	Kor Kor Ma
		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	Ayok
		キバシサンジャク	<i>Urocissa flavirostris</i>	Chongkiling
	センニョヒタキ科	ハイガシラヒタキ	<i>Culicicapa ceylonensis</i>	
	シジュウカラ科	ベニビタイガラ	<i>Cephalopyrus flammiceps</i>	Danmbarang Kha
		ヒガラ	<i>Parus ater</i>	Bru Shu Kha
		ハイイロカンムリガラ	<i>Parus dichrous</i>	
	ヒヨドリ科	シリアカヒヨドリ	<i>Pycnonotus cafer</i>	Boi Thoirok
		シロガシラクロヒヨドリ	<i>Hypsipetes leucocephalus</i>	
	ツバメ科	ショウドウツバメ属の一種	<i>Riparia sp.</i>	Rong Kha
	ウグイス科	カオグロムシクイ	<i>Abroscopus schisticeps</i>	
	メボソムシクイ科	チフチャフ	<i>Phylloscopus collybita</i>	Sergi Fang Chung
		チャバネムシクイ	<i>Phylloscopus pulcher</i>	Sergi Fang Chung
		キゴシムシクイ	<i>Phylloscopus maculipennis</i>	Sergi Fang Chung
		ウスゴシムシクイ	<i>Phylloscopus chloronotus</i>	Sergi Fang Chung
		ヤナギムシクイ	<i>Phylloscopus trochiloides</i>	Sergi Fang Chung
		センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	Sergi Fang Chung
		ヒマヤムシクイ	<i>Phylloscopus reguloides</i>	Sergi Fang Chung
		マユグロモリムシクイ	<i>Seicerucus burkii</i>	Limchi Kha
	セツカ科	ノドグロハウチワドリ	<i>Prinia atrogularis</i>	Doiy Kha
	チメドリ科	ノドジロガビチョウ	<i>Garrulax albogularis</i>	Dojee Balongbu
		ミミジロガビチョウ	<i>Garrulax caeruleus</i>	Jonmikir
		ムナフガビチョウ	<i>Garrulax lineatus</i>	Jonmikir
		キンバネガビチョウ	<i>Garrulax affinis</i>	Jonmikir
		ズアカガビチョウ	<i>Garrulax erythrocephalus nigrimentus</i>	Jon
		ミミグロチメドリ	<i>Heterophasia pulchella</i>	
	メジロ科	ハイバラムシメジロ	<i>Zosterops palpebrosus</i>	Dambarang Kha
		チャエリカンムリチメドリ	<i>Yuhina flavicollis</i>	Chijoktang
		ノドフカンムリチメドリ	<i>Yuhina gularis</i>	Chijoktang
		チャバラカンムリチメドリ	<i>Yuhina occipitalis</i>	Chijoktang
	ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	Ru Gum Kha
	ゴジュウカラ科	カシミールゴジュウカラ	<i>Sitta cashmirensis</i>	Jarsi Kha
	キバシリ科	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	Shing Shuk Shukpa
		ワキアカキバシリ	<i>Certhia nipalensis</i>	Shing Shuk Shukpa
	ツグミ科	カオグロイソヒヨドリ	<i>Monticola rufiventris</i>	Mon Kha
		オオハシツグミ	<i>Zoothera monticola</i>	
		シロエリツグミ	<i>Turdus albocinctus</i>	
	ヒタキ科	オオルリチョウ	<i>Myophonus caeruleus</i>	Jo Ngang Kar
		サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	Atachungi
		ロクショウヒタキ	<i>Eumyias sordida</i>	
		シロボウシカワビタキ	<i>Chaimarrornis leucocephalus</i>	Yang Kha Ama
		カワビタキ	<i>Rhyacornis fuliginosa</i>	Merong Kha
		ノビタキ	<i>Saxicola maurus</i>	
		クロシロノビタキ	<i>Saxicola ferrea</i>	Pang Kha Young Ba
	スズメ科	ニューナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	Boing Kha
		スズメ	<i>Passer montanus</i>	Boing Kha
	セキレイ科	タイリクハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	Ser Kha Chongma
		ツメナガセキレイ	<i>Motacilla flava</i>	Ser Kha Chongma
		ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	Grem Kha
	アトリ科	キバラカワラヒワ	<i>Carduelis spinoides spinoides</i>	Nama Kha
		クリムネアカマシコ	<i>Carpodacus nipalensis</i>	



写真1 カザノワシ。ディランからメラクムに向かう標高 2000m 付近の谷の上昇気流に乗って、霧の中から突然姿をあらわした。(2009.08.29 撮影)



写真2 谷間にあるショーダ村（標高 1900m 付近）でネズミ類を捕まえたクマタカ。(2010.09.14 撮影)



写真3 ディランゾン（標高 1500m 付近）で、民家のトタン屋根にスズメの餌として米が撒かれているところにスズメが集まって餌をとっているところ。(2012.08.24 撮影)



写真4 シロボウシカワビタキ。ブロッパにバター、チーズの作り方を教えてくれた。そのお礼に頭に白いシンボルを与えたという伝承がある。ナガジジ（標高 3600m 付近）で 2010.08.27 撮影。アッサムの低地にも分布している。



写真5 霧雨の中、地衣類の繁茂する樹間にあらわれたノドフカンムリチメドリ（ディランからメラクムに向かう途中、標高 1800m 付近、2012.08.24 撮影）



写真6 タワンの北、標高 3900m 付近のシャクナゲ類の茂みにあらわれたクリムネアカマシコ。(2012.08.18 撮影)

クマタカ (写真2)、タカサゴモズ、チベットモズ、シリアカヒヨドリ、ニュウナイスズメ、スズメ (写真3)、タイリクハクセキレイ、キバラカワラヒワ、ビンズイの13種であった。

モンパ語による鳥類の認識

記録されたうち、ディランのモンパ族における地方名 (モンパ語のディラン方言) について聞き取り調査を行った。モンパ族で英語の理解できる人に英語とモンパ語の通訳によって、モンパ族の2名の60代男性から聞き取りをした。鳥類の地方名については、通訳によるアルファベット表記である。今回出現した70種のうち、58種について、37の地方名があることがわかった。このうち、26の地方名は1つの学名と対応し、10の地方名で、2~7の学名に対する分類名であった。1種については、2つの名称が語られた。残り12種については、地方名がわからなかった。

3種以上の地方名がわかった科について種名と地方名の対応関係を見ると、

ハト科:	2地方名/5種
タカ科:	2地方名/5種
カラス科:	3地方名/3種
メボソムシクイ科:	2地方名/8種
チメドリ科:	3地方名/5種、不明1種
メジロ科:	2地方名/4種
ヒタキ科:	4地方名/4種、不明3種
セキレイ科:	2地方名/3種

となり、カラス科、ヒタキ科では種が細かく区別されていたが、ハト科、タカ科、メボソムシクイ科、チメドリ科、メジロ科は、複数種に同一の種名をつけていた。ハト科、タカ科は、集落の周辺でよく見られる中型~大型の鳥類であるが、種があまり区別されていない傾向にあった。チメドリ科、ヒタキ科のような比較的小型の鳥類において、不明種がみられた。

さらに、学名の異なる種に同じ地方名が付されている場合を見ると、同じ科の複数の種を示すものが9地方名、科の異なる複数の種を示すものが1地方名みられた。同じ科の異なる種に対する地方名は、以下のようであった。

キツツキ科: Tok Tor Ma、アカゲラ属 (*Dendrocopos*) に属するキバラアカゲラ (*Dendrocopos darjellensis*) とチャバラアカゲラ

(*Dendrocopos hyperythrus*) の2種を示す地方名だった。

ハト科: Titiri、3属4種を示す地方名だった。

タカ科: Kaira、5属5種を示す地方名だった。ただし、カザノワシは、Mon Kukpa とも呼ばれていた。

キバシリ科: Shing Shuk Shukpa、キバシリ属 (*Certia*) の2種を示す地方名だった。

メボソムシクイ科: Sergi Fang Chung、メボソムシクイ属 (*Phylloscopus*) の7種を示す地方名だった。

チメドリ科: Jonmikir、ガビチョウ属 (*Garrulax*) 3種を示す地方名だったが、同属の2種の別種には別の地方名がある。

メジロ科: Chijoktang、カンムリチメドリ属 (*Yuhina*) の3種を示す地方名だった。

スズメ科: Boing Kha、スズメ属 (*Passer*) 2種を示す地方名だった。

セキレイ科: Ser Kha Chongma、セキレイ属 (*Motacilla*) 2種を示す地方名だった。

タカ科では、出現した5属5種が同じ地方名で、ハト科では、3属4種が同じ地方名をもち、1種のみ、オナガアオバトは別の地方名を持っていた。

キツツキ科、キバシリ科、メボソムシクイ科、チメドリ科、メジロ科、スズメ科、セキレイ科では、属レベルで地方名がつけられていると理解することができる。同属で異なる地方名が含まれるのは、ガビチョウ属 *Garrulax* のみで、5種に対して3地方名がみられた。

同じ地方名が付されている学名の異なる種が科の異なる種に使われる場合は、1例だけだった。Danmbarang Kha は、シジュウカラ科とメジロ科2属2種を含む。シジュウカラ科のベニビタイガラとメジロ科のハイバラメジロを Danmbarang Kha と呼んでいた。どちらも白いアイリングがあってオリーブ色~黄色の体色であることなど類似しているためではないだろうか。

種名の由来と伝承

4種については、地方名の名付けのいわれを聞き取ることができた。ハト類 (Titiri) は、その鳴き声が種名となっている。カザノワシは、深い森 (Mon) の馬鹿者 (Kukpa) と呼ばれている。キバ

シリ類 (Shing Shuk Shukpa) は、木の幹を歩き回るといった特徴的な行動にちなんで名付けられている。シリアカヒヨドリ (Boi Thoirak) は、特徴的な黒いトサカにちなんで名付けられている。ノドジロオウギビタキ (Lambsi Kha) は、踊りを踊るような行動にちなんで名付けられている。カザノワシを除くと、鳴き声、行動、形態などの特徴にちなんで名付けられていた。

また、シロボウシカワビタキ (写真4) は、頭部が白い。これについて、「ブクバにバター、チーズの作り方を教えてくれた。そのお礼に頭に白いシンボルを与えた。」という伝承があるという。

考察

今回、記録された70種中、13種が村落やその周辺環境でみられた。日本では、これら村落に見られる鳥類の分布と中山間村の過疎化との関係が知られ、石川県白山市麓の農山村では、水田耕作が一定規模行われている集落¹⁰⁾ではスズメの繁殖がみられるが、小規模集落、家の疎かな集落、周囲に森林の多い集落、孤立性の高い集落、人口が少ない集落、高齢化が進んだ集落、家畜家禽が少ない集落ではスズメの繁殖がみられない¹¹⁾。京都府美山町では、スズメの生息環境として、牛舎と養鶏場が餌場・ねぐら・営巣場所として重要な役割を果たしており、過疎化がスズメの生息にも影響を与える事を指摘している¹²⁾。

ウエスト・カメン県でも、家屋が孤立して建てられている Brokpa の住居周辺では、スズメ類はみられず、ある程度の規模の密集した家屋のある集落でのみみられた。また、ディランゾンでは、スズメに餌をやる光景もみられた (写真3) ほか、山間にあるタワン県の尼僧寺でもニュウナイスズメがみられた。こうしたことから、人の生活規模が一定程度盛んであれば、スズメ類は人間の活動に付随して生息域を広げてきたと同時に、現在、そして今後、これら集落周辺環境を生息場所としている鳥類は、集落周辺の人間活動が一定規模維持されていることによって、持続性が保たれていると推察される。

モンパ族である村人たちは、村落周辺の鳥を詳しく識別しているというわけではないようである。カラス科のように、各種の特徴がはっきりしており、よく区別されている分類群もあれば、ハ

ト科やタカ科のように、身近な中型～大型鳥類であるにも関わらず、おおまかに科レベルで認識しているような分類群も見られた。

地方名については、民族生物学に一般的にグルーピングがみられ、5～6の階層構造が見られ、固有の名称で呼び分けることは比較的稀で、一般的に属的な名称に形容詞を付して多様な種に名称をつけがちであるとされる^{13,14)}。例えば、ニュウナイスズメとスズメが記録されたが、これは、スズメという和名に対して形容詞を付してニュウナイスズメという名称がつけられている。しかし、ディラン地方では、Boing Kha という固有の名称が付されていた。Kha は、現地のモンパ語ディラン方言で鳥を意味するので、鳥に形容詞のついた○○鳥というような呼称はみられるが、その他の固有名詞が形容詞を伴って呼ばれることはない。また、キツツキ類 (Tok Tor Ma)、ハト類 (Titiri)、タカ類 (Khaira) など、固有の名称で呼び分けているようである。これらの点から、ディラン地方では、鳥類の分類について、鳥というおおまかなグルーピングはなされているが、細分的なグルーピングとはなっておらず、階層的な分類体系となっていないようであり、この地方の鳥類分類の特徴と言えるだろう。民族分類学では、栽培種のようにその文化で重要な種に形容詞を付し、重要性の低いものに固有の名称を付けるという傾向が知られている^{15,16)}。本調査が行われたディラン地方での聞き取りによると、住民は農耕地での狩猟などは行われないという。この地域における鳥類の文化的な重要性の低さゆえに、この地域では鳥類が固有の名称で呼ばれていたと推察される。

謝辞

この調査は、総合地球環境学研究所プロジェクト「人の生老病死と高所環境—『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」(代表・奥宮清人氏)において行われた。また、安藤和雄氏には、調査並びに本文にコメントをいただいた。また、現地での調査でご協力いただいた皆様にも感謝いたします。

引用文献

- 1) Conservation International, Hotspots, <http://www.conservation.org/How/Pages/Hotspots.aspx>,

- (2015 年 10 月 29 日)
- 2) Critical Ecosystem Partnership Fund, Himalaya, <http://www.cepf.net/resources/hotspots/Asia-Pacific/Pages/Himalaya.aspx> (2015 年 10 月 29 日)
 - 3) Critical Ecosystem Partnership Fund, Indo-Burma, <http://www.cepf.net/resources/hotspots/Asia-Pacific/Pages/Indo-Burma.aspx> (2015 年 10 月 29 日)
 - 4) Critical Ecosystem Partnership Fund, Japan, <http://www.cepf.net/resources/hotspots/Asia-Pacific/Pages/Japan.aspx> (2015 年 10 月 29 日)
 - 5) 中村司・杉原広, 1989, 山梨県環境別鳥類生息調査. 山梨県林務部林政課, 67pp.
 - 6) 山本紀夫, 稲村哲也 (編著), 2000, ヒマラヤの環境誌 山岳地域の自然とシェルパの世界. 八坂書房, 335pp.
 - 7) 小坂康之, B Saikia, T Mingki, H Tag, 安藤和雄, 2010, 帰化植物の渡来経路—インド北東部アルナーチャール・プラデーシュ州の事例から. ヒマラヤ学誌, 11, 127-136
 - 8) 水野一晴, 2012, 神秘の大地, アルナチャル アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会. 昭和堂, 211pp.
 - 9) Richard Grimmett, Carol Inskipp, Tim Inskipp, 1999, Pocket Guide To The Birds Of The Indian Subcontinent, Christopher Helm Publishers Ltd, 384 pp.
 - 10) 林哲, 1993, 白山麓の集落とスズメの生息地選択 I 大日川および直海谷川流域の状況. 石川県白山自然保護センター研究報告書, 第 20 集, 19-32
 - 11) 林哲, 1996, 白山麓の集落とスズメの生息地選択 II—手取川及び尾添川, 大日川, 梯川流域の状況—. 石川県白山自然保護センター研究報告書, 第 23 集, 23-38
 - 12) 二村一男・大島誠一, 1996, 山村地域のスズメの生息分布. 京都大学農学部演習林集報, 29, 2-13
 - 13) Berlin, B., Breedlove, D., & Raven, P. 1973. General Principles of Classification and Nomenclature in Folk Biology. *American Anthropologist* 75(1), 214-242.
 - 14) Berlin, B. 1992. Ethnobiological Classification: Principles of Categorization of Plants and Animals in Traditional Societies. Princeton: Princeton University Press. 364pp.
 - 15) Berlin, B. 1976. The Concept of Rank in Ethnological Classification: Some Evidence from Aguaruna Folk Botany. *Amer. Ethnol.* 3, 381-399.
 - 16) D'Andrade, R.G. 1995. The Development of Cognitive Anthropology. Cambridge University Press. 288pp.

Summary

Avifauna in West Kameng District and Tawang District, Arunachal Pradesh, India

Nobuhiro Ohnishi

Department of Bioenvironmental Design, Faculty of Bioenvironmental Science, Kyoto Gakuen University

The avifauna and these local name were studied in West Kameng District and Tawang District, Arunachal Pradesh, India. A total of 70 species (6 orders and 27 families) were recorded. Of these bird species, 36 local names were recorded. Thirteen species occurred around the comparatively larger villages. This suggests that distributions of these species (e.g., sparrow) would be influenced by the human activity in Eastern Himalaya as known in the mountainous area of Japan. The generic names were used in the local name of Dirang area.

Keywords: Eastern Himalaya, Avifauna, Ethnobiology